

どれがほんとう？

万太郎俳句の虚と実

高柳克弘

Katsuhiro TAKAYANAGI

どれがほんど？——万太郎俳句の虚と実 目次

序論 5

第I章

季語の伝統にどう向き合うか 14

万太郎の中の「月並み」 29

非—イメージ 42

万太郎の取り合わせ 52

切れと切字 65

「型」と「型破り」 83

第II章

言葉の共振 92

緩急 98

言葉のコストパフォーマンス 104

万太郎の時間意識 110

哀の人 126

前書との照応 136

地名、人名 149

言葉遊び 158

結論 万太郎俳句の未来 167

久保田万太郎 略年譜 177

序論

久保田万太郎の名は、現代において俳句を作る者であれば、誰でも知っている。

歳時記をひもとくと、万太郎と署名のある句が、例句としてたくさん載っている。入門書の「表は簡潔に」や「切字を使いこなす」などの項目でも、必ずといっていいほど万太郎の句が紹介されている。

そして、万太郎のことを知りたくて、いくつかの解説書をひらけば、「下町の抒情俳人」という評価が、そこには書いてあるはずだ。

ある作家にレッテルを貼ったとき、その見えなくなつた下にあるものこそが、作家のいちばん大切なものだった、ということとはしばしばある。私もまた、万太郎に貼られた、「下町の抒情俳人」というレッテルをのみ、見ていた時期が長かった。

その認識を変えたのは、次の一句だった。

時計屋の時計春の夜どれがほんと

万太郎

この「時計屋」が、下町の老舗の時計屋であると考えられる理由は、どこにもない。たとえば私が、この句を読んでまっさきに思い出したのは、ハリウッド映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の冒頭、タイムマシンを研究している博士の実験室で、無数の時計が置かれてカチカチと音を立てているところに、主人公が入ってくるシーンであった。

この句を虚心坦懐にみれば、きわめてモダンで、時間という概念の不思議さに切り込んだ、普遍的な詩情の句といえるのではないだろうか。

下町に生まれ、その人情あふれる雰囲気、銜いなく書き取った俳人。——そんなレツテルを、剝がしたくなった。これが、本書を執筆するにあたっての動機である。

万太郎の弟子であった成瀬櫻桃子によれば、万太郎は、

なにがうそでなにがほんとの寒さかな

という句を、自信句としてよく揮毫していたそうだ（『久保田万太郎の俳句』ふらんす堂、平成七年）。万太郎の小説「市井人」の中でも、俳句好きの主人公の句としてこれが挙げられ、師との出会いのきっかけになる。物語をすすめる、要として登場するのだ。

万太郎が心に抱えていた「なにがうそ」「なにがほん」というつぶやきは、虚実論として、俳句において昔から論じられてきた。

俳諧といふは別の事なし、上手に嘘をつく事なり。 各務支考 『俳諧十論』享保4年刊

支考は芭蕉の弟子の一人で、芭蕉の教えを大系立てて理論化し、全国に広めた。その過程で作られたキャッチコピー風の言葉で、俳諧の表現における、現実にとらわれない、虚構の要素の重要性を指摘したものだ。

成瀬氏の伝える、万太郎の次のエピソードは、支考の俳句論と、時代や流派を超えて、あざやかな一致を見せる。

昭和二十年、戦火を避けて鎌倉に住んでいた万太郎が、ある句会で、

東京に出なくていゝ日鷓鴣

と詠んだ。同じ句座にいた人々が、「先生、みそさがいましたか」と聞いたところ、万太郎はたちどころに、「見なけりや作つていけませんか」と切り返し、一同はキョトンとしたというのである。

沢に近いところに棲息する「鷓鴣」は、都会から離れた田舎の情景を想像させる。「東京に出なくていゝ日」の解放感を裏付けるために、「鷓鴣」の季語の効果を期待して、そこに置く。実際にはいたか、いなかったかは、問題ではないのだ。東京に出る用事のない日に、ミソサザイが姿を見せたら、いつそう寛いだ気分になるにちがいない。実感がある。万太郎は、まさに、「上手に嘘」を

ついたわけだ。

「なにがうそ」「なにがほんと」と考え続けた万太郎にとっては、そこにいないミソサザイを、言葉の上に登場させることなど、ごく当たり前のことだった。だが、そういう意識を持たない人々——いま、そこにある現実がすべてと考える、ごくふつうの人々にとっては、理解しがたいことであつたのだ。

むろん、虚実論は、俳句論に限つたことではない。近松門左衛門の「虚実皮膜」論を持ち出すまでもなく、そもそも芸道の真実とは、虚と実の微妙なはざまになり立つものだ。

だが、万太郎は、本業であるはずの戯曲や小説よりも、俳句の中でこそ、「上手に嘘をつく」ことができた。照れ屋であつたという万太郎は、戯曲や小説では、思い切つて「実」を出すことができなかつたのではないか。いや、当人としては「実」を出していたのかもしれないが、現代の私からみると、万太郎の生々しい本音が、戯曲や小説からは聞こえてこない。「実」がなければ、「虚」も生きない。淋しいことだが、現代において、万太郎の戯曲や小説よりも、はるかに俳句の評価が高い理由は、そこにあるのではないか。「東京に出なくていゝ日」という、ほろつとこぼれ出た万太郎の本音を受け止めたのは、俳句という十七音の小さな器であつた。

*

俳句史の上で、虚の句に長けた俳人と言えば、やはり蕪村を措いて他にない。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

蕪村

雲の峰に肘する酒吞童子かな

草枯れて狐の飛脚通りけり

乱世の時代へタイムスリップしたり、怪異を登場させたり。蕪村は、自在に虚の世界を構築した。万太郎は、虚を意識した俳人であったが、こうしたわかりやすい空想の句は、存在しない。私小説的な句と同様に、あからさまな虚構の句も、万太郎の期するところではなかった。「どれがほん」と、悩み、迷いながら、虚と実の融合という難しい境地に挑んだのが、万太郎だ。

実に近づき過ぎれば、現実ありのままの、只事になる。虚に傾たなれば、絵空事になってしまう。万太郎は、「どれがほんと」「なにがうそでなにがほんと」とつぶやきながら、虚と実の間に、世界の真実を見極めようと、足掻き続けた俳人であった。

足掻こうと、もがこうと、俳句を作る者に与えられているのは、言葉のほか、何もない。しかも、ごく少ない数しか使うことができない。

万太郎が、足掻き続けられたのは、少ない言葉を操る、高度な技巧があったからだ。

万太郎の言葉の力については、従来、あまり切り込まれてこなかった。ごく平明で、力みのない

句であることから、心の底から自然に湧いてきた言葉であるかのように見える。万太郎自身も、句が生まれる時には「浮かぶ」「ひょいと、偶然に口のにぼる」という感覚であることを証言している（中山善三郎との対談、「春燈」昭和三十九年五月号）。

だが、「どれがほんと？」という、存在の本質にかかわる問いかけに対するのに、自然、天然だけで挑めるはずもない。虚実の間を攻めるといのが、それほどたやすいことであれば、苦労はなし。

万太郎の表現の巧さについて、探ってみよう。本書はまず、そうした問題意識から出発している。第1章では、万太郎の俳句を、歴史的な文脈から検証している。「文人俳句」といわれ、いわゆる正統とされる「ホトトギス」の俳句とは距離があるといわれているが、実際、どういふ点が違うのであろうか。そして、近代以前の古俳諧とは、どのような関係にあるのか。季語や切字といった伝統的な俳句の要素に、万太郎はどう向き合っていたのか。万太郎俳句の表現を対象に、その歴史的な位置づけを試みた。

第2章では、それらのことを論じていく中で見えて来た、万太郎の表現の独自性について、取り上げている。先人や同時代の俳人には見られない、表現や主題の独自性を指摘することで、従来の万太郎に貼られていた「下町の抒情俳人」のレッテルを剥がすのが目的である。

そして結論では、ふたたび序論の問題意識、すなわち、「どれがほんと」と問いかけ続けた万太郎が得た、「答え」について考えてみたい。もちろん、文学に「答え」などはあるわけもないのだ

が、それを承知で、私の“答え”を示してみたい。そういう意味で、これはごく私的な万太郎論なのであるが、俳句に関心のある読者、あるいは万太郎に関心のある読者に、それぞれ万太郎がみずから投げかけた問いの“答え”について考えてもらうきっかけになればと願っている。